

# 戦時体制と職業的な口頭芸

## 寿々木米若の口演記録にみる演目選択の方法

Japan's National Mobilization during WW II and Narrative Performance:  
SUZUKI Yonewaka's Choices of *Rokyoku*

真鍋昌賢

はじめに

- ①戦時体制下の浪曲業界
- ②口演記録に記された演目
- ③メディア空間と演目の関係

おわりに

### 【論文要約】

本稿の目的は、第二次世界大戦の戦時体制下における職業的な口頭芸演者の演目選択の方法を明らかにすることにある。とりあげる史料は、浪曲師・寿々木米若の「演題帳」（国立演芸場所蔵）であり、分析対象となる期間は、昭和15年（1940）から、第二次世界大戦終戦までの期間である。本稿の関心は、演者の口演とそれをとりまく社会的な背景との関係性を分析することにある。具体的にはまず、巡業における演目の消長を表象し、興行にかけられる演目の寿命を視覚化する。米若の演目を分析的に、戦時下を舞台とした「同時代物」と、江戸期などの過去を舞台とした「時代物」に分類することは、戦時体制下における米若の演目選択の仕方を理解する助けとなる。2席口演において「同時代物」を口演する場合、もう一つの演目に「時代物」を選ぶことが常套的であった。「愛国浪曲」として発表された「涙の舟唄」の寿命からは、国家の期待を受けとめながらも、客受けを考慮して演目を選択してゆく、当時の浪曲師の姿をかいま見ることができる。また、興行で口演される演目の種類は、レコード・ラジオの演目リストと比較されることによって、特徴付けられる。それらの演目は重なりつつもずれをもつ。演者と国家機関及びレコード会社の関係性のもとに、口頭芸にとってのメディアの性格は差異化されていた。新作がつくられ、口演されたとしても、客受けを考慮せざるを得ない興行においては、定着しなかった演目もある。むしろ米若にとって、「時代物」は興行には欠かせない演目であった。戦時体制下において、国家機関の期待や統制を受けながらも、そのみに口演の現場が準拠していたわけではない。米若は客受けを見据えた演目選択を行っていたのである。

キーワード：口頭芸、戦時体制、メディア、巡業、芸人